

# 「戦争はだめ 核兵器なくして」



7人兄妹の6番目として、1929年(昭和4年)9月、土佐清水で生まれた横山さんは、中学卒業後、三菱重工長崎兵器製作所に半ば強制的に働くことになりました。

そのころには、日本による中国侵略が泥沼化し、米国にミッドウェー海戦で負け敗戦色が年々強まるなか、学徒出陣が始まり、工場などへの学徒動員など総動員体制ができあがっていました。

横山さんが担任教諭に進路を相談したときのことです。「日本が食うか食われるかの時だ。進学など国賊だ。天皇陛下のため、兵隊さんのため長崎の三菱兵器製作所に行



「戦争はだめだ。放射能を出す核兵器は、みんなの力でなくしてほしい」。高知・土佐清水港近くの自宅で一人暮らしをする元マグロ漁船員の横山幸吉さん(92)は、米国による長崎への原爆投下とビキニ核実験で二重に被ばくしました。実質審議が始まったビキニ損失補償訴訟の原告として、国がやる戦争の愚かさ、被ばく者に冷たい日米両政府への怒りを語りました。(阿部活士)

ビキニ損失補償訴訟の原告

横山幸吉さん

## 長崎とビキニ核実験 二重に被ばく

け」と言われた。半強制的でした」と振り返ります。

同級生6人とともに動員され、横山さんが配属されたのはトンネル式の地下部品工場で、海軍の魚雷をつくっていたといいます。

「みんな苦労していた。私らは寮から弁当を持って工場に通った。中身はコメじゃないよ。大豆のカスだよ。それに比べ工場のえらい人は白飯を食っていた。何が『天皇陛下のため』かと思った。朝鮮の人も働かされていた。囚人服のような白い服を着せられ、暑い日なのにトロッコを外で引いているのを見かけた。かわいそうだと思った」

同製作所で働かされた朝鮮人労働者は、「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」などの調べで、推定1400人ほどになることがわかっています。

米国が原爆を長崎に落とした8月9日。

「昼飯前で、トンネル工場の電気が突然消えた。2、3歩歩いたら吹き飛ばされた。上からなにかバラバラと落ちてきて、とっさに旋盤の下に隠れた」

トンネル入り口は火の海でした。トンネル奥から山の手には逃げました。川は死んだ人でいっぱいでした。

(5面につづく)